

焦点を絞ることとする。小学校の子どもたちに教室で詩やことば遊びを導入し、生き生きとした教育実践を行ってきた記録といえ、山本なおこ氏の「一年生詩集あさのきょうしつ」「詩を楽しむ」「詩のある教室（中学年）」の載っている『キリンののって』（てらいんく）や鈴木清隆氏の同人誌『蝸牛』1号から19号まで連載の「こどものことばと作品」や同氏の『ことば遊び、五十の授業』（太郎次郎社）などが思い浮かぶが、本稿では我田引水で恐縮ながら身近な具体例によって筆を走らせることをご海容願いたい。

〔事例一〕千葉市T小学校では、'07年度より全校児童が『詩の音読集』（日本児童文学者協会付設・少年詩・童謡・詩論研究会発行）を持ち、火曜日の朝、15分間の「音読タイム」の時間に読み合うことを始めた。以下、当校研究主任の網代多鶴子氏のレポートを要約して記す（児童文学誌『窓』15号より）。

私は昨年度二年生の担任。21人の元気で明るく、優しい言葉をいっぱい持っている素直な子どもたち。一編の詩を二週続けて読む。一週目は新しい詩との出会い。新鮮な発見があった。二週目は詩への思いが深まった。「今日は何を読む?」「この詩を読みたいなあ」子どもたちは火曜日の朝を楽しみにしていた。私が読んで、みんなが読んで。一人で読んだり、グループで読んだり、自分の速さで読んだり、そろって読んだり。いろんな読み方に挑戦。素直な感想もどんどん出た。私はその都度感心させられた。子ども

もたちに癒される。そんな時間だった。

二年生の最後の音読タイムの日には、一人ひとりが一番お気に入りの詩を選びそれを音読した。譜んじている子もたくさんいた。笑顔いっぱい時間だった（以下六年生の部は省略）。結果として、クラス人気ナンバーワンは小松静江氏の「にんじんにんじゃ」に決まった。以下に、本文を引く。

月火水木金よう日

にんじんにんじゃはきゆうしよくの

おかずにこっそりしのびこむ

シチューにカレーにスープにサラダ

ビビンバ・やきそば・ませごはん

分身ぶんしんの術じゆつであらわれろ

ようし!にんじやとたたかうぞ

にんじんばくつとたべちゃった

ぱくぱくぜーんぶたべちゃった

にんじんにんじゃをやった

からだがむずむずしてきたぞ

ぐんぐん早く走れそう

サッカーせんしゅになれるかなあ